

二、從明治四十四年五月申報書、「彫塑ノ教授方法」
至明治四十四年十月申報書

三、從明治四十四年十一月申報書
至明治四十五年三月申報書

四、從明治四十五年四月申報書、「大正元 布帛及メダイヌノ研究
至大正 元年拾月申報書、 年十月
及其教授方法」

五、從大正元年十月申報書、「大正二年
至大正二年三月申報書、 四月十八日 欧人ノ目ヨリ見タル我
國ノ彫刻ニ就テ」

六、「彫塑製作法及其教育法〔大正二年八月〕」

七、從大正二年四月申報書、「大正二年四月廿九日仏國パリ府
至大正二年十月申報書、「大正二年四月廿九日仏國パリ府
出發伊太利ニ入り諸市ノ彫刻ヲ研究シ大正二年六月廿日バ
リニ着ス其間ノ研究事項（及仏國美術トノ比較）」
「大正二年七月ヨリ十月ニ至ル旅行〔仏、獨〕」

八、帰朝届

右の文部大臣宛申報書は全て「文部省外国留学生規程細則（明治三十六年改正）」に則して提出されたものであるが、水谷の場合のようにそれが全て現存する例は珍しい。水谷のみならず日本近代彫刻史研究のためにも貴重な資料と言える。なお、水谷と同時期に留学した小林万吾については、やはり小林が文部大臣に提出した「伊太利巡礼日記」（控）が残っている。

右の留学関係文書は本書第二巻刊行後に発見された。これによって第二巻の記述を補えば、水谷は明治四十四年一月二十六日から四月二十七日までパリでテラコッタの研究を行い、五月アカデミー・ジュリアンに入学して六月三十日までベルシエに就いて彫塑を研究。その後は自分のアトリエで研修し、大正二年四月から六月までイタリアを旅行、七月から十月までフランス、ドイツを旅行してい

る。

⑤ 高橋篝庵の起用

昭和八年四月十四日から九月三十日まで高橋義雄（号篝庵）が「工芸史」担任講師をつとめた。篝庵は文久元年八月二十八日生まれ。慶応義塾卒業後時事新報記者となり、明治二十年渡米し、翌二十一年米國ボークプシー・イーストマン商業学校を卒業。その後三井銀行理事、三井呉服店理事、三井鉱山会社理事、王子製紙会社社長などを歴任して明治四十四年実業界から隠退、専ら文芸著作に従事。茶道家として著名であった。講師受諾につき四月九日付『東京朝日新聞』は肖像写真入りで次のように報じた。

上野美術學校へ民間の講師、茶道の大家篝庵高橋義雄氏が七日付で講師と決定した、来る廿日から毎週木曜日二時間づつ「茶道から見た工芸史」を講義する氏は赤坂一ツ木の自邸で謙遜しながら語る

民間で觀たもの、實驗したものを學生に吹き込む——といふのは和田校長の新らしい試みであり門戸開放の意味でも結構と思つて引受けたわけです

⑥ 石沢正男の起用

石沢正男は明治三十六年三月三十一日に東京に生まれ、水戸中学、私立日本中学、第一高等学校を経て東京帝国大学文学部美術史学科に進み、昭和三年卒業。同五年ニューヨークのメトロポリタン